

東ジャワの初期ムハマディヤ運動に関する研究

利 光 正 文

はじめに

1912年11月18日、キヤイ＝ハジ＝アフマド＝ダフランにより、中部ジャワの古都ジョクジャカルタにおいて、イスラム団体ムハマディヤ Muhammadiyah が設立され、ダフランは12月20日、オランダ植民地政庁に対し団体の許可願いを提出した。当時、民族運動の潮流が渦巻き始めており、政庁側は団体結社に対する警戒心を募らせていたため、許可はすぐにはおこななかった。総督は1914年の8月22日、ムハマディヤを始めて認可したけれども、その活動をジョクジャカルタ地区に限定するとともに、活動期間も29年間という期限つきであった。⁽¹⁾

ムハマディヤは改革派ムスリムの団体であり、活動の目標はイスラムの浄化と学校教育・社会福祉にあった。具体的には、コーランとスンナに基づき、イスラム神秘主義スーフイズムの慣行である聖墓崇拜、ジャワ固有のスラメタンおよびヒンドゥー的要素タルキンの禁止をするとともに、近代的イスラム学校の創設、孤児院や病院の設立を活動目的とした。ダフランはジョクジャで活動を続けながら政庁と粘り強い交渉を行い、1917年、ジョクジャ以外の地への運動拡大を総督に要請、20年9月2日付布告により、ジャワ全域での活動を認可された。この結果、ジョクジャカルタ以外に支部が設立されることになり、その第1号は翌21年のスラバヤ支部の誕生であった。

東ジャワのスラバヤ支部を皮切りに、ブローラ（西ジャワ）、クパンジャン（東ジャワ）、22年にはソロとガールット（中部ジャワ）、バタヴィア（西ジャワ）、プカロンガン（中部ジャワ）という具合にジャワの主要部に支部が拡大した。⁽²⁾ 植民地政庁はムハマディヤ支部の広がりに対し監視を怠らず、その集会には必らずオランダ人官吏を派遣し、集会の内容を細かく観察し、総督に報告させている。しかしながら、ムハマディヤの運動は宗教改革と社会教育活動に限定され、政治運動とは一線を画したため、政庁の厳しいチェックをクリアーし、ジャワ島以外への支部設立も認可を受けることになる。1926年にはパダン・パンジャン（スマトラ）、マカッサル（セレベス）、27年にはバンジャルマシム（ボルネオ）と外領へも支部は拡大する。

さて、小稿で取り扱われるスラバヤ支部はムハマディヤ最初の支部であり、支部誕生の原点がここにあると思われる。そして、スラバヤ支部の設立に最大の貢献をするのがキヤイ＝ハジ＝マス＝マンスールである。創立者ダフランは別として、マンスールはムハマディヤの数多くいるリーダー達の中では、その経歴と実行力とで、インドネシア人の中でその名はつとに有名であった。マンスールについての詳細な考察は稿を改めるとして、ここでは、ムハマディヤ・スラバヤ支部設立の経緯とマンスールの果たした役割、そしてそのことを通して、東ジャワのイスラム改革運動の史的意義を考えてみたい。

1. 支部設立前のスラバヤ

インドネシア第2の都市、スラバヤ。バタヴィア（ジャカルタ）を東京とすれば、スラバヤはさしずめ大阪で、経済の中心である。スラバヤの南パスルアンは糖業プランテーションの中心地であり、⁽³⁾東ジャワはその他タバコや米作、そして製塩業といった具合に種々の産業が発展し、それらの貿易港としてスラバヤは栄えてきた。経済の中心として活気あふれる町スラバヤには、20世紀初頭より、さまざまな団体・結社が生まれた。20世紀インドネシア民族運動の初期、最大の勢力を誇り、オランダ植民地政庁に脅威を与えた政治団体イスラム同盟 Sarekat Islam とスラバヤとの関係は、切っても切り離せない結びつきを持っていた。1911年ソロにおいて設立されたイスラム同盟は1912年スラバヤ支部を設立し、支部長には新聞“ウトサン・ヒンディア Oetoesan Hindia”の編集長チョコロアミノトが就任した。⁽⁴⁾政治能力に秀でていたチョコロは、ソロの裕福なバティック（ジャワ更紗）商人で同盟委員長をしていたハジ＝サマンフディと指導権を争い、スラバヤ派として勝利を収め、中央本部委員長に就任後は独裁的な権限を行使した。⁽⁵⁾ムハマディヤとイスラム同盟とは異母兄弟のような関係にある。創立期のムハマディヤ指導者たちの大半は最初イスラム同盟に加盟しており、後、袂を分かちムハマディヤを設立する。イスラム同盟はムハマディヤの反面教師的な役割も果たし、政庁によるイスラム同盟の運動への弾圧後は、ムハマディヤが大量の同盟員を吸収し、その勢いを増してゆく。

政治運動を行ったイスラム同盟とは一線を画したイスラム改革団体が、スラバヤにはいくつか存在した。アラブ人の団体ムラトゥル・イフワン Moeratoel Ichwan やアル・イルシャド Al-Irsjad がそれである。前者の実体はよく分らないけれども、後者はムハマディヤと非常に緊密な関係にあった。さらに、バンドンで設立されたイスラム協会 Persatuan Islam の指導者となるシンガポール生まれのアフマド＝ハッサンも、この時期スラバヤで活動していた。外国に向って開かれた都市スラバヤは、外国人の到来とともに異国の文化や思想が持ち込まれたけれども、スラバヤを除く東ジャワの農村地帯には、イスラムの伝統的な慣習が強固に残った。スラバヤの西南ジョンバンは伝統的なイスラム塾プサントレン Pesantren の中心地であった。現在でもその数二万といわれ、ジャワ全域に分布するプサントレンは、伝統的なイスラム教育を行っており、ジャワ農民の間に多くの支持者を持っている。プサントレンを拠点とする伝統派ムスリムたちは、ムハマディヤの設置に対抗して、1926年ナフダトゥル・ウラマ Nahdlatul Ulama を結成した。この両者は現在でも対抗関係にある。

このように見てくると、東ジャワの場合、都市と農村の乖離がハッキリしてくる。イスラム改革運動の中心スラバヤと、イスラム伝統派の牙城ジョンバン。ムハマディヤ運動は都市を中心に発展してきており、農村にまで勢力を及ぼし得ないという弱点があった。この意味から、東ジャワはその典型と考えられる。

2. マス＝マンスールと改革運動

1896年スラバヤに生まれたマンスール⁽⁶⁾は12才の時メッカに巡礼し、カイロのアズハル大学で3年間勉強した。帰国後、彼はイスラム学校マドラサ・ナフダトゥル・ワタン Madrasah Nahdlatul Wathan で教鞭を執った。後の同志、スラバヤのウラマ、K.H.マス＝アルウィ、K.H.A.ワッハブ＝ハスブラ、K.H.アミエン等と知己になった。エジプトにはイスラム改革主義者ムハンマド＝アブドゥッがおり、マンスールもその改革思想にふれたものと思われる。彼は生徒に教えるかたわら、イスラ

ム同盟に加入した。さらに彼はイスラム伝道 tabligh のための団体イフヤ・ウス・スンナ Ihya Us Sunnah を自ら組織、イスラム改革主義の実践に乗り出してゆく。マンスールはチョコロアミノトと知り合い、交友を深めるが、2人はその後よきライバルとしてムスリム社会をリードする役割を担う。チョコロアミノトとは同様の伝道団体タミル・ゴフィリン Ta'mirul Ghofilin を作り、活動を続ける。加えて、マンスール自らイスラム学校マドラサ・ヒツプル・ワタン Madrasah Hizboel Wathan を設立、約40人の生徒に対しイスラム教育以外にオランダ語も教え、学校のシステムにも近代的要素を取り入れた。⁽⁷⁾ プサントレンの旧態依然たるイスラム教育では近代世界に適應できない、と言うのが改革主義者たちの主張であった。

次に、マンスールとアル・イルシャドとの関係であるが、マンスール自身はその卒業生ではないけれども、アル・イルシャドの研究者ビスリ＝アフアンディが「他の事柄の中でアル・イルシャドの優越性は、ムハマディヤの多くの有名なウラマや教師がイルシャド学校の卒業生であったということから派生している。⁽⁸⁾」と述べている如く、同志となったその卒業生たちから、イスラム学校運営のための多くのノウハウを得たものと推測される。

それからもう一つ、マンスールに大きな影響を与えたと思われるのは、スマトラのミナンカバウよりやって来たファキ＝ハシムである。彼はマンスールとともにイスラムの伝道に従事したが、彼の宗教に関する説明は伝統的な考え方にまっこうから挑戦するものであり、伝統主義者たちにショックを与えたい。⁽⁹⁾ ファキ＝ハシムは伝道組織イフヤ・ウス・スンナにおいてマンスールの片腕として活躍するが、イスラム改革運動の先進地出身であるだけに、マンスールも大いに彼を頼りにしていたであろうことは当然考えられる。ただ1つ不思議なことに、後述するが、支部成立時の役員の中に彼の名前がない。よそ者であることと、その激しい性格の故に、他の幹部との関係がしっくりいかなかったのかもしれない。

ともあれ、マンスールはイスラム世界の最高学府出身という経歴とエネルギーな行動力により、スラバヤでは“若きウラマ”としてその名を知られるようになってきたが、伝統主義者たちの風当たりも強くなってきたようである。マンスールたちは、政治運動に全力を傾け政庁と摩擦ばかり起しているイスラム同盟のやり方に不満を持つようになり、宗教運動のみを行っている純粋な宗教団体との提携を考え始めた。スラバヤを囲む東ジャワの農村地帯は前述の如くイスラム伝統派の中心地であるので、より大きな組織との連携が焦眉の急とされたのであろう。

3. 支部設立

1920年、マンスールはファキ＝ハシムやハジ＝アリらとともにジョクジャカルタに出かけ、すでに高名なムハマディヤ委員長アフマド＝ダフランと面会し、その人物に打たれた。その折、マンスールはダフランにスラバヤを訪れるよう要請した。⁽¹⁰⁾ マンスールたちがムハマディヤの会員となったのは、恐らくこの時であろう。翌21年、ダフランは招きに応じ、スラバヤを訪問した。この時のことはムハマディヤの機関誌スアラ・ムハマディヤ Soewara Moehammadijah に「K. H.アフマド＝ダフランと M. H.ファハロディンがスラバヤのムスリム団体 (Ichjaoes-soennah) の会議に出席し、会議終了後、この団体の幹部よりムハマディヤ・スラバヤ支部開設の相談を受けた。」と記されている。ダフランに同行したファハロディンはムハマディヤ副委員長であり、ダフランとともに民族独立英雄の称号をインドネシア政府より贈られている。この会議でマンスールはダフランに対し、「どうしたら (ムスリム) 社会の状態を改善することができるのですか。」と質問した。ダフランは「別に薬はないが、コーランの中に示されている。」と答えた。⁽¹²⁾ とある。禅問答のように聞こえるが、イスラムに精通した人の言葉として十分な説得力があったようだ。宗教議論はともかく、支部

創設について突っ込んだ話し合いが行われた。

21年11月1日、スラバヤ支部成立。支部役員は、支部長マス=マンスール、副支部長K. H.アリ 渉外, H. アズハリ=ラウィ, H. アリ=イスマイル, 会計K. ウスマン, 委員ウォンドウィジョヨ, H. A. ラフマン=ウスマン, アジャルスニョト, スモレジョ⁽¹³⁾といった顔ぶれであった。これら役員たちの出身階層は明確でない。副委員長のアリはマンスールの同志であり、苦楽を共にしてきた友人でもあった。各人はそれぞれイスラムの勉強に精進したウマラたちであり、恐らく商人も何人か含まれていると思う。階層分析についてはこれからの課題としたい。

ところで、支部設立2年後には役員顔ぶれがガラリと変っている。幹部の間でどのようなことがあったのか分らないけれども、メンバーが次のように交代している。次に支部数と会員数も示す。

図1 スラバヤ支部役員 Pengeroes Soerabaja (1923年)

支部長	Pemoeka	M. マンスール Mansoer
副支部長	Pemoeka moeda	E. ハミド Hamid
書記長	Djoeroe soerat pertama	カルトスプロト Kartosoebroto
書記次長	” kedoera	スダルモ Soedarmo
”	” ”	バジュリ Badjoeri
会計	Djoeroe wang	H.ムスタファ Moestafa

出所) Verslag Muhammadiyah Di Hindia-Timoer, Januari-December, 1923.

図2 ムハマディヤ支部数

年	西ジャワ	中部ジャワ	東ジャワ	マドゥラ	計
1923	2	12	1	0	15
1926	4	24	18	5	51
1932	7	112	26	8	153

出所) ALFIAN, Islamic Modernism in Indonesian Politics: The Muhammadiyah Movement During the Dutch Colonial Period, The Univ. of Wisconsin, Ph. D, 1969.

図3 ムハマディヤ会員数 (1923年)

ジョクジャカルタ	1,230
ソロ	216
バタヴィア	348
ブルウォケルト	84
プカロンガン	75
プカジャンガン	93
プルボリング	231
クラテン	73
スラバヤ	272
計	2,622

出所) Vorschlag Muhammadiyah, Di Hindia-Timoer, op. cit..

この図で感じることは、スラバヤ支部誕生後数年間における支部数と会員数の伸びである。東ジャワから西ジャワへと支部は広がってゆく。短期間でのムハマディヤの膨張は何故であろうか。従

来の伝統的なイスラムにはあき足らない改革運動の波が一気に渦を巻いて噴出したということかもしれない。スラバヤでの成功がその流れを加速させたのかもしれない。それでは、ムハマディヤがジョクジャカルタだけの単なる地方組織に終わらず、ジョクジャ以外の地に支部を拡大しえた理由は何か。それはムハマディヤの実践活動にあると思われるので、次の項で考えてみたい。

4 支部活動

スラバヤ支部はマンスールの指導の下、様々な活動をしてゆく。手はじめは下部組織の結成である。1922年、ボーイスカウト組織ヒツブル・ワタン Hizbul Wathan を作る。同時にマドラサ・ヒツブル・ワタンを設け、イスラム教育を行う。ヒツブル・ワタンはジョクジャカルタの中央本部に設立されていたが、スラバヤはその支部として設立された。⁽¹⁴⁾ その翌年には半ば独立した婦人団体アイシヤ Aisijah の組織化。アイシヤ会員は会員証と会則を持ち、ムハマディヤに協力しながら独自性を追求する。支部役員と会員数は次のとおり。

図4 アイシヤ・スラバヤ支部役員 Pengoeroes Aisijah (1923年)

支 部 長	Pemoeka	H.ファティマ Fatimah
副支部長	Pemoeka moeda	ウンム=トハ Oemmoe Toha
書 記 長	Djoeroe soerat	シティ=スハルティヤー S. Soehartijah
会 計	Djoeroe wang	H.ガイヤー Gaijah
監 査	Djoeroe periksa	シティ=ハサナ S. Hasanah

出所) Verslag Moehammadijah Di Hindia-Timoer, op. cit.

図5 アイシヤ会員数 (1923年)

ジョクジャカルタ	349
スラバヤ	157
プカジャンガン	97
プルボリンゴ	231
計	724

出所) Verslag Moehammodijah Di Hindio-Timoer, op. cit..

アイシヤの会員数はスラバヤは多いが、中部ジャワのプルボリンゴがジョクジャに匹敵する程の数である。インドネシアの女性史にとって重要と思われるが、このこともこれからの課題としたい。ともあれ、アイシヤは学校と孤児院の経営にも乗り出し、ムスリム女性の啓蒙団体としての役割を果たし始める。

さて次に、学校教育についてももう少し詳しくふれる。マンスールもイスラム学校の教師を出発点として改革運動を実践して行ったが、西欧式普通教育のカリキュラムを導入したムハマディヤ学校の開設が企画される。近代社会に適合するためには、イスラム教育と世俗教育の二本立てにしなければ時代に取り残されるもいうのがムハマディヤ幹部達の共通認識であった。しかし、勿論イスラム教育を主としなければならないことは言うまでもない。やや時代が下がるが、ムハマディヤ学校の数が図6のようになっている。HISはHollandsch Inlansch School (蘭印学校)である。この学校ではオランダ語を使った西欧式の教育が行われており、オランダの倫理政策に対応するものであった。数字から見るかぎりでは、まあまあ率であるが、スラバヤだけの数ではないので、判断がむづかしい。ややかたよった見方かも知れないが、「スラバヤではムハマディヤによって運営されているいくつかの学校がある。しかし、この学校はあまり意味をなさない。⁽¹⁵⁾」というオランダ人官吏の言葉もあるので、教育活動については、必ずしも順調なすべり出しではなかったのかもしれない。やはり、プサントレンの中心ジョンバンをひかえているので、ムハマディヤ学校の浸透度はいまひとつであったといえまいか。加えて、既存の改革主義団体の学校も存在しているという事情も

あろう。

図6 ムハマディヤ学校数 (1927年)

	ムハマディヤ学校	HIS ムハマディヤ
西ジャワ	2	3
中部ジャワ	59	16
東ジャワ	7	6
計	68	25

出所) ALFIAN, op. cit..

社会福祉活動としては、ムハマディヤ診療所 Poliklinik の開設である。スラバヤ支部は診療所には力を入れたようである。ポリクリニックの所長にはドクトル・ジャワ学校の出身で、プディ・ウトモの初期幹部ストモ医師を迎え、24年の9月14日に開所式を行った。式には中央本部副委員長 K. H. ファハロディンも出席し、盛大に祝った。この時スラバヤ支部は一般の人々に対して次のようにアピールした。

「われわれムハマディヤは、人々の救済のために診療所を開設した。しかし、このクリニックは特定の人々のみを対象とするのではなく、あらゆる宗教・人種を問わず、すべての人々のために建てられたものである。……R.ストモ医師を長とし、8人の医者によって運営される。われわれはたかだか5000ルピアの資金しかない。どうぞわれわれを助けてほしい。」⁽¹⁶⁾

この訴えの中には、ムハマディヤの精神が凝縮されているように思う。次いで挨拶に立ったストモ医師はこれに続けた。

「われわれは学校を作った。健康のためにヒツブル・ワタンも作った。孤児院も作った。さてここに、語られるべき場所がある。明朝われわれは診療所を開く。ここを利用するのはだれか。ヨーロッパ人けっこう。ジャワ人けっこう。中国人あるいはアラブ人でもけっこう。貧しい人でもけっこう。われわれはどんな人でも迎え入れる。」⁽¹⁷⁾

こうして、ムハマディ診療所は活動を始めた。学校教育や社会福祉活動はムハマディヤのオリジナルではなく、キリスト教の伝道形式にヒントを得たものであるが、ムハマディヤがいち早くそれを取り入れ、しかもその対象はムスリム以外にもむけられており、この団体がジョグジャカルタだけの単なる地方組織に終わらなかった理由の一つは、このあたりにあるといえよう。

ところで、イスラム浄化のポイントは、伝統主義者たちが行っている聖墓崇拝の禁止にあった。ジャワにイスラムを布教したとされている九聖人 wali sanga⁽¹⁸⁾がいるが、ジャワでは九聖人の墓に参詣する人が多い。スラバヤではスナン＝アンベル、となり町グレシクにはスナン＝ギリの墓がある。両者の墓所は非常に立派であり、現在でもおまいりに訪れる人が絶えない。まして20世紀の前半であるから、その盛んなさまは十分に想像がつく。プサントレンと聖墓は、伝統主義者にとっての精神的紐帯となっていたであろう。このような風土の中で育ったマンスールではあるが、青春時代の一番多感な時期にアズハル大学で学び、イスラム改革思想に浸ったわけであるから、聖墓崇拝を憎む気持ちは人一倍強かったものと推察される。ムハマディヤが行った伝道活動の内容についてここではふれる余裕がないけれども、伝統派ムスリムのやり方を激しく批難したであろう。反面、伝統主義者たちの危機感が26年のナフダトウル・ウラマ結成へとつながるが、結成の翌年開かれた大会⁽¹⁹⁾で、ウラマたちは「ムハマディヤは植民地政庁と手を結ぶもので、敵と考えられる。」と激しい口調できめつけた。ムハマディヤが看過できない大きな勢力となったことの証左ともいえよう。

ここで最後に、イスラム同盟との関係をいま一度見ておこう。スラバヤ支部とイスラム同盟との密月時代は続く。スラバヤ支部設立の時点でも、創立者のアフマド＝ダフラン自身まだイスラム同盟員も兼ねていた。支部成立の翌年10月、マンスールはイスラム同盟とともにスラバヤで「イスラム会議」を召集した。この会議には、イスラム改革団体だけでなくイスラム伝統派もこぞって参加したが、両者は激しく対立してもわかれに終わった。結果はともかく、イスラム同盟とはその後も提携し、26年にはマンスールがチョクロアミノトとともにメッカに巡礼し、そこで開かれるイス

ラム会議に出席する予定にしていた。⁽²⁰⁾これは実現しないままになったが、両者の緊密な関係がしのばれる。しかし、この後チョコロアミノトがムハマディヤと対立していたアフマディヤAhmadiyah⁽²¹⁾に接近したため、28年両者は袂を分かち、独自の道を歩み始めた。ムハマディヤの一本立ちである。

こうしてスラバヤ支部は順調なスマートを切ったといいうる。伝統主義者たちに取り囲まれた中であって、とにかく支部活動が継続されていった背景には、イスラム改革団体との協力関係を保ち続けたマンスールの高い手腕が評価されるとともに、ジャワ経済の中心地であり、進取の気象に富んでいたスラバヤという土地柄も考慮に入れる必要があろう。そして1926年にスラバヤで開かれた第15回ムハマディヤ大会が、支部活動の統決算であった。大会の開催により、スラバヤ支部の基盤は確固たるものとなった。ちなみにスラバヤ大会での支部出席者は分らないけれども、その翌年プカロンガンで開かれた大会での数はつかめるので、参考までに次に掲げる。

図7 第16回ムハマディヤ大会（プカロンガン）出席支部および人数（1927年）

	支 部 (Tjabang)	人数
1	シグリ Sigli (スマトラ)	1
2	クタラジャ Koetaradja (スマトラ)	1
3	ボンドウオソ Bondowoso	2
4	ガウイ Ngawi	2
5	バンギル Bangil	4
6	マディウン Madioen	4
7	クトアルジョ Koetoardjo	3
8	スラマン Semarang	17
9	チラチャブ Tjilatjap	1
10	テガル Tegal	2
11	マラン Malang	1
12	プルウォケルト Poerwokerto	3
13	ガルット Garoet	3
14	バタヴィア Betawi	6
15	カリアンゲット Kalianget	1
16	ブミアユ Boemiajoe	3
17	マカッサル Makasser (セレベス)	3
18	マジエナ Madjenang (セレベス)	6
19	パスルアン Pasoeroean	2
20	ポノログ Ponorogo	5
21	マニンジャウ Manindjau (スマトラ)	3
22	シマプル Simaboer (スマトラ)	1
23	スラバヤ Soerabaia	4
24	ルマジャン Loemadjang	2
25	ブリタル Blitar	1
26	アジバラン Adjibarang	2
27	バトゥル Batoer	2
28	ソロ Solo	9
29	プカロンガン Pekalongan	5
30	クドゥンウニ Kedoengwoeni	3
36	シトゥボンド Sitoebondo	2
32	スラゲン Sragen	3
33	クドゥズ Koedoes	2
34	クラテン Klatten	2

35	トマングン Temangoeng	2
26	ブレベス Brebes	2
37	ボヨラリ Bojolali	3
38	サンパン Sampang	1
39	パダンパンジャン Padang Pandjang(スマトラ)	1
40	スラウィ Slawi	2
41	バンジャルネガラ Bandjbrnegara	9
42	プルボリング Poerbolinggo	12
43	バニユマス Banjoemas	1
44	クラクサアン Kraksaan	1

出所) Soeara Moehammadijah, 1928.

支部出席者の合計は151名である。そのうちジャワ以外(外領)は12名。ジャワ(マドラウも含む)におけるムハマディヤ支部の拡大が一目瞭然であろう。

おわりに

スラバヤ支部長マンスールは1925年のスアラ・ムハマディヤに、ムハマディヤの8人の著名な指導者の1人として写真入りで紹介されており、次代を担うホープと目されていた。事実そのとうりで、マンスールは31年に東ジャワ地区委員長、そして36年にはとうとう第4代中央本部委員長に就任(42年まで)する。委員長在任中の37年にはナフダトウル・ウラマに働きかけ、全インドネシア・イスラム会議(MIAI)を結成、その責任者にもなる。42年には日本軍のインドネシア占領により、軍政機関が作ったプトラ PUTERA(民衆総力結集運動)の指導者として、スカルノ、ハッタ、デワントロとともにインドネシア民族を代表する“4つ葉のクローバー”の1人と呼ばれた。マンスールは太平洋戦争終了の翌年死亡するが、64年にはスカルノ政府により“民族独立英雄”とされた。

以上、皮相的にはあるが、ムハマディヤ・スラバヤ支部成立の過程を、マス＝マンスールの足跡とオーバーラップさせながら考察を進めてきた。マンスール没後、スラバヤ支部の歩みは順調とはいえない。マンスールという巨星が墮ちた後は、もはや昔日の輝きを取り戻せないままとなってしまった。東ジャワがイスラム伝統派の拠点であるだけに、強力なリーダーシップを発揮する人物の存在なくしては、その橋頭堡にくさびを打ち込むことはむづかしいということであろうか。

終わりに、1926年スラバヤで開催されたムハマディヤ大会については史料上の制約もあり言及することができなかった。将来の課題としたい。

註

- ① A. Jainuri, MUIAMMADIYAH: Gerakan Reformasi Islam Di Jawa Pada Awal Abad Kedua Puluh, PT Bina Ilmu, Surabaya, 1981, P. 36.
- ② Ibid., P. 42.
- ③ 糖業については R. E. Elson, Javanese Peasants and the Colonial Sugar Industry, Oxford Univ. Press, 1984. に詳しい。
- ④ Drs. Anhar Gonggong, I. O. S. COKROAMINOTO, Departmen Pendidikan Dan Kebudayaan Proyek Biografi Pahlawan Nasional, 1976?. を参照。
- ⑤ 深見純生「初期イスラム同盟に関する研究(2)」『南方文化』第4輯(1977年)155—157ページ。
- ⑥ Soebagijo I. N., K. H. MAS MANSUR: Pembaharu Islam di Indonesia, PT GUNUNG AGUNG, Jakarta, 1982. を参照。

- ⑦ Muhammadiyah:kenang-kenangan Muhammadiyah seluruh Indonesia genap 40 tahun dan Muhammadiyah Tjabang Surabaya genap 31 tahun Surabaya, Muhammadiyah Tjabang Surabaya, 1952, PP. 29-30.
- ⑧ Bisri Affand, SHAKH AHMAD AL-SURKATI : His Role in Al-Irshad Movement in Java in the Early Twentieth Century, McGill Univ. M. A. Thesis, 1976, P. 77.
- ⑨ Bisri Affandi, op. cit., p.82.
- ⑩ Muhammadiyah, op. cit., P. 39.
- ⑪ Soewara Moehammadijah, 1922, P. 16.
- ⑫ MU'TAMAR MUHAMMADIYAH ke-40, Cabang Surabaya, 1978, P. 27.
- ⑬ Muhammadiyah, op. cit., P. 33.
- ⑭ Soewara Moehammadijah, 1923, P. 224.
- ⑮ Memori Residen Surabaya, 4 Juli 1924, Arsip Nasional Republik Indonesia Penerbitan Sumber-Sumber Sejarah No. 10, Jakarta, 1978, P. 48.
- ⑯ Soewara Moehammadijah, 1924, P. 41.
- ⑰ Ibid., P. 170.
- ⑱ 九聖人とは、マウラナ=マリク=イブラヒム、スナン=アンベル、スナン=ボナン、スナン=ギリ、スナン=ドラジャット、スナン=カリジャガ、スナン=グヌン=ジャティ、スナン=クドウス、スナン=ムリアのこと。
- ⑲ Geheim Mailrapport 26/x/28, Koloniaal Archief, Indonesia, 1977, P. 271.
- ⑳ 永積昭・間亭谷栄『東南アジアの価値体系 2 インドネシア』現代アジア出版会 昭和45年 172ページ。
- ㉑ ラホールのアフマディヤはミルザ=ワリ=ベイグによって1925年インドネシアに導入された。そして最初はその教えを取り入れられないとみなしていたムハマディヤからの援助を受けた。(Deliar Noer, The Modernist Muslim Movement Indonesia 1900-1942, Oxford Univ. Press, 1973, P. 150)

Some Notes on the early Mohammadiyah Movement in East Java

Masahumi TOSHIMITSU

In 1912 Muhammadiyah, one of the modernist Muslim's organizations, was established by K. H. Ahmad Dahlan in the Central Javanese city of Yogyakarta. He requested to the Dutch colonial government to permit Muslims more control over their affairs. The governor general of Batavia gave him the permission of the Muhammadiyah movement within the city of Yogyakarta in 1914. The governmental officials kept strict watch over this movement to ascertain whether this organization would become an opponent to the Dutch or not. Dahlan and his upholders, however, were not satisfied with the governor general's permission, for they wanted to expand their movement from Yogyakarta to other Javanese cities. Their petition was approved by the government in 1920.

At the end of the nineteenth century K. H. Mas Mansur, a founder of the Muhammadiyah branch of Surabaya, was born in East Java. He went to Mecca for the pilgrimage in his young days and continued his Islamic study at Azhar in Cairo for three years. After coming back to his homeland he became an Islamic teacher in Surabaya. Mansur was engaged in mission as a reformist of Islam. As he was very interested in the Muhammadiyah movement, he decided to form the Muhammadiyah branch in Surabaya in 1921.

In this paper I would like to analyze the process of the establishment of this branch and the content of the Muhammadiyah movement in East Java. In addition to this I would also like to make clearer the socio-educational activities of this organization.

—平成元年 9 月 30 日受理—
(本学助教授・東洋史)